

岐阜県小中学校教育研究会特活進路部会

令和3年度研究テーマについて

1. テーマ設定にあたって

岐阜県の人口においては、大正9年の国勢調査から増え続けていたが、2005年（平成12年）を境に減りつつある。2015年に200万人であった人口も、20年後の2035年には、170万人になると予測されている。また、年齢層において言えば、65歳以上が2015年で約28%、2035年で、約34%と予測されている。待ったなしの超少子高齢化がやってくる。少子高齢化によって、所得格差によって貧困率※は上昇し、雇用格差によって家族構成も核家族化、1人化が増加し、教育格差によって、学力差は激化の一途をたどると予想される。こうした背景は、将来への不安が増幅するとともに、就職・進学を問わず、進路を巡る環境の厳しさも計り知れないものがある。また、反社会・非社会行動の低年齢化と激化、いじめ（SNS等の普及による）や不登校、自殺などの深刻な問題の背景にもなっていると思われる。

このような状況の中、子どもたちが「生きる力」を身に付け、明確な目的意識を持って日々の学業生活に取り組む姿勢、激しい社会の変化に対応し、主体的に自己の進路を選択・決定できる能力やしっかりとした勤労観、職業観を身に付け、それぞれが直面する様々な課題に柔軟にかつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができるようにすることが求められる。そのために、我が国において「キャリア教育」という文言が公的に登場し、その必要性が提唱された。

「キャリア」とは、人は、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を担いながら生きている。これらの役割は、生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものである。また、このような役割の中には、所属する集団や組織から与えられたものや日常生活の中で特に意識せず習慣的に行っているものもあるが、人はこれらを含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断し、取舍選択や創造を重ねながら取り組んでいる。

人は、このような自分の役割を果たして活動すること、つまり「働くこと」を通して、人や社会にかかわることになり、そのかかわり方の違いが「自分らしい生き方※」となっていくものである。

このように、人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが、「キャリア」の意味するところである。

なぜ「キャリア教育」が必要なのか。平成23年12月9日キャリア教育における外部人材活用などに関する調査研究協力者会議から考えてみる。

ア) キャリア教育の理解の共有

キャリア教育を推進していくとき、「一人一人の教員の受け止め方や実践の内容・水準のばらつき」を解消しなければならない。「キャリア教育」とは、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」ということである。また「キャリア発達」とは社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程である。この定義に基づき、子どもたち一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力を身に付けさせていかなければならない。

学校におけるキャリア教育は、子どもたち一人一人の発達や社会人・職業人としての自立を促すための「理念と方向性」を示すものであり、特定の活動や指導内容・方法に限定されるものではない。学校の教育活動全体で様々な教育活動を通して、教育的な意図に基づき、体系的・系統的に取り組むようにしなければならない。

次代を担う子どもたちが生きる社会は、どんどん厳しさを増していくであろう。その中で、どのような状況にあっても、これに適応したり、置かれている状況を自分で打ち破ったりしながら、社会の中で自分の能力を発揮できることを目指さなければならない。そのために、生涯にわたる多様なキャリア形成に必要な能力や態度を培うとともに、それらを通して、とりわけ勤労観・職業観を自ら形成・確立できるようになることを目標とする。

イ) 学校での生活や学び、進路選択に対する目的意識の希薄さの解消

文部科学省の調査によれば、高校生の今自分が通っている高等学校に入学した動機は、普通科の約6割が「自分の学力にあっている」と回答し、「自分の個性を伸ばすことができると思う」「自分のやりたい勉強ができると思う」と答えた生徒はそれぞれ15%に満たないとの結果であったそうである。これは多くの中学校の進路指導が「進学指導」になっているためだと思われる。

また、TISS※調査やPISA※調査における子どもたちの学習意欲は、他国に比べ、将来就きたい仕事や自分の将来のために学習をしようとする意識が低いということが明らかになっている。このように目的がはっきりしないまま高等学校へ進学しているということは、学校での生活や学び、進路選択に、子どもたちがはっきりしないまま高等学校へ進学しているということは、学校での生活や学び、進路選択に、子どもたちがはっきりとした目的意識をもって取り組めていないということである。逆に言えば、学校生活の全てにおいて、キャリア発達の視点をもった指導をしていくことが重要である。

ウ) 社会の「本物」に触れさせること、「働くことの喜び」を伝えることの重要性

子どもたちが、学校で学んでいることと自分の将来を結びつけて考えたり、自分の興味や資質に気付いて、それを伸ばすにはどうしたら良いかと自ら考えたりできるようにするためには、実際に社会で働いている人や、社会で行われていることの本質や意義に触れ、理解すること、また、それを通して働くことの意義や喜びについて理解することが重要である。したがって、社会や職業に関わる様々な体験的な学習活動の機会を設け、それらの体験を通して、自分と社会の双方についての多様な気づきや発見をさせるような活動を仕組んでいく必要がある。

職場体験活動はその一つであるが、現状の「働くこと」だけでなく、「最先端の研究を行なっている研究施設や大学等を訪れ、第一線の研究者から施設や研究について説明を受けたりする」「社会の第一線で活躍する卒業生の職場を訪ねてその仕事について説明を受けたり、見学したりする」「地域の企業の技術者を学校に招いて最新技術の指導を受ける」といった「本物」に触れさせる機会を作っていくことも考えていく。

エ) 「世の中の実態や厳しさ」を伝えることの重要性

中学校のキャリア教育においては、経済・社会・雇用などの基本的な仕組みについての知識や、税金・社会保険・年金や労働者としての権利・義務などについての知識等、社会人・職業人として必ず必要となる知識を得させるとともに、男女共同参画社会の意義や仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の重要性などについて、自己の将来の在り方生き方に関わることとして考察を深めさせることが必要である。こうした知識の習得や意欲・態度の涵養とだけでなく、「世の中の実態や厳しさ」を子どもたちに学ばせることも重要である。例えば、経済のグローバル※化とそれに伴う激しい国際競争の下で、これまでにない厳しい環境にあり、産業等の状況の変化に伴い雇用形態も変化が生じている。就職先が決まらないまま卒業した場合や就職後早期に離職した場合、また、出産前に離職した女性が、その後に再就職を求める場合などに、正規労働者としての就職が困難となる状況がある。地域の特性上、「まともに進学しなくてもとりあえず楽しく生活している」という姿を目の当たりにすることも少なくないため、外部講師などに依頼して、「厳しさ」を実感させていくことが重要である。また、国の課題でもある男女共同参画社会への移行についても、「女性の社会的・職業的自立」の視点からは、「結婚後、特に出産後において、男性の家事や育児の分担が不十分であること」「女性が働き続けるための社会的インフラの整備が不十分であること」など、働き続けることに困難が伴っているという現実もある。仕事や就職先を決める大きな役割の一つでもあるので、社会科等の

教科の授業の中で意識的に扱いたい。

オ) 「働くことの喜び」と「世の中の実態や厳しさ」の両面を学ぶ

今の日本は、完全失業率や非正規雇用率※の高さ、無業者や早期離職者の存在などといった大きな困難に直面している。こうした厳しさがあるがゆえに、子どもたちが社会に適応しながら現実に立ち向かい、意欲を持って様々な課題を克服し、自らの目標に向かって努力して、社会的・職業的に自立するために、「働くことの喜び」と「世の中の実態や厳しさ」の両面を同時に伝えていくことが重要である。今日の厳しい状況の中でも、働くことの意義や喜びを感じつつ、これに立ち向かい活力ある社会の構築に奮闘する経営者や従業員、研究者や技術者、商店経営者や農業・漁業従事者、福祉施設で働く人などが、子どもたちの周りには、少なからずいる。学校は、そのような地域の人々と手を携えて、「働くことの喜び」と「世の中の実態や厳しさ」の両面を伝えていきたい。

カ) 「キャリア教育」を通して「学習の意義や意味」を学ぶ

キャリア教育を行う意義として、学校生活と社会生活や職業生活を結び、関連付け、将来の夢と学業を結び付けることにより、子どもたちの学習意欲を喚起することができる。今自分が勉強していることと、将来自分が巣立っていくであろう社会との関係を見だし、それらを結び付けることで、自分が勉強している理由やその重要性を理解させるのである。学校生活や学びや進路選択の際は、子どもたちが目的意識をもって、あるいは目的意識に裏打ちされた学習意欲をもっているか否かは学校教育の根元に関わる問題である。「なぜ学ぶのか」「なぜ学ばなければならないのか」「何を学ぶべきか」について、教科指導部や研推と連携を図って明確にしていく必要がある。

キ) 家庭や地域・社会と連携することに関して

家庭は、子どもたちの健やかな育ちの基盤であり、すべての教育の出発点である。子どもは、就学前から社会的自立を果たすまで、家庭において、家族との様々な関わりの中で育っていくものである。まずは、家族の中で大人が「働くことの喜び」や「世の中の実態や厳しさ」なども伝えながら、子どもたちの社会的・職業的自立という視点に立って、子どもたちを育み、支えていくことが求められる。この辺りは、PTAとも連携し、「家族が果たすべき教育的な責任」について明確にしていく必要がある。

また、ほとんど全ての子どもたちは、近い将来、日本の社会・経済を支えることになる子どもたちに、社会の「本物」、「働くことの喜び」、「世の中の実態や厳しさ」などを伝え、学校での生活や学び、進路選択に気付きや考えるきっかけを与えるために、学校、家庭、地域・社会や産業界が「協働」して、キャリア教育を推進していくことが必要である。

中学校3年間を見通した特別活動の中核を成す進路指導の充実について

進路指導は、単なる「出口の指導（進学指導）」ではなく、子どもたちの「将来の人生全体を考えさせる指導」であるべきである。しかし、どうしても「進学指導」に陥ってしまい、「数字による指導」が行われているように感じてしまう。進路指導の基本的なスタンスは「A君の真面目さと指示されたことをきちんとやろうとする姿勢は、M学園の教育方針で生きるよね。それに、仲間を蹴落としてでも、競争をしてでも勝ち抜こうというバイタリティには弱さを自覚しているし・・・。こまめに面倒を見てもらえるM学園はあっているよね。」といったことが全員に話せなければならないだろう。担任の立ち位置は、「本人の持ち味を、どこで、どう伸ばすか」そして、その思いを、どのように分かりやすく本人と保護者に伝えていくのかということが進路指導のポイントになる。当然、こうした指導をするためには、1年生からの積み上げ必須である。そこで、進路指導において、「アイデンティティの確立」と「ライフプランの作成」の二つを中心に進路指導を充実させていくことである。これは、言い換えれば、「自分らしさとは何かを考え、自分が生きていく上での基盤となる価値観を見出し、その上に立って、職業を中心として、自分の将来を設計すること」である。

また、自己理解・進路の計画・進路情報・価値観（勤労観・職業観）の4つ観点を各学年で繰り返し特別活

動の中で設定（「生きる」進路指導主題系統図 参照）し、進路学習を進めていくことが必要である。

新学習指導要領の特別活動※の目標は次の通りである。

「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互い
のよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を
育成することを目指す。

- (1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の
仕方を身に付けるようにする。
- (2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思
決定したりすることができるようにする。
- (3) 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係
をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態
度を養う」

と述べている。

「人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う」の部分は、集団の一員と
してよりよい生活や人間関係を築こうとする多様な集団活動を通して、望ましい認識がもてるようにすると
ともに、集団の中で自己を生かす能力を養っていくことを示している。例えば、集団の一員として、目標をもつ
こと、将来に夢や希望をもって現在の生活を改善しようとする、協調性や責任感、規範意識を高めるこ
と、人権を尊重することなどにかかわる自己の生き方についての考えを深め、その大切さを認識できるように
することである。また、これらのことにかかわる自己のよさや可能性を集団の中で生かしてよりよい生活を築
いていくことができるような能力を育成することである。「人間としての生き方」や「自己実現を図ろうとす
る態度」は、進路指導に強く関わってくる言葉でもあり、中学校の特別活動における進路学習の重要性を位置
づける言葉といえる。

「集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成する」の部分は、自己の所属する様々な集団に所属感
や連帯感をもち、集団生活や社会生活の向上のために進んで力を尽くそうとする態度や能力を養うことを示し
ている。生徒個人は、様々な集団や社会の一員として生活しているが、この中で各自の果たす役割は何か、ま
た自分はどのような責任を果たさなければならないかを自覚することは、集団全体の発展にとっても、個人
の成長にとっても、将来社会人として自立していくためにも大切なことである。このようなことを経験する場
として特別活動があるので、このことを目標の一つとして取り上げている。

以上を踏まえて、特別活動や進路指導の視点から、本会のあり方について考える。

人の生き方や進路には多様な選択の可能性があり、決して一様ではない。人は、自己の個性を自覚し、これ
を伸ばすとともに、多様な生き方、進路選択肢の中から、自己の個性を十分に発揮することができる生き方、
進路を選ぶことによって、生きがいのある、充実した人生を築くことができる。

そうした個性を、集団生活の中において伸長する場が学校であるが、児童生徒たちは仲間との人間関係の構
築に弱さを見せている。また、いじめや不登校などの問題も依然としてなくなる。子どもたちの精神的、
社会的自立が遅れる傾向にあることは明らかであり、小中学校においても、キャリア教育の視点をも含めた
「生き方」について考えを深め、自己を将来的に生かす能力が強く求められている。

特活進路部会は、これから起こるであろう問題点に対して、実践・提案を積極的に進めることが必要であ
る。話し合い活動・自己を見つめる活動・仲間と共に喜び合う活動、そして、将来の「生き方」を考える進路
指導（キャリア教育）を重要な柱としていく必要があると考える。

特別活動や学級経営のねらいは、最終的には児童生徒の自己実現であろう。集団の中で個の変容を図るべ
く、様々な教育活動を意図的に仕組んでいくことが私たちの務めであるとも言える。その中核をなすものが、
進路指導（キャリア教育）であるという立場で、「一人一人の児童生徒が、自己を見つめ、自己実現に向かっ

て努力し続ける力を持つことができる」ようにするための指導方法の創造や、評価の方法と場を明らかにしていく必要がある。

2. 児童・生徒の姿

前述のように「生き方指導」という側面から、児童・生徒の実態、めざす姿を考える。

(1) 児童・生徒の実態

- ① 現在の生活について見つめ、短期的な目標を持って取り組むことのできる児童・生徒が多い。
- ② 自分の考えを進んで発表することを苦手とする児童・生徒が多い。
- ③ 決められた活動には取り組めるが、必要な活動を生み出すまでには至っていない。
- ④ 自己や他者の「よさ」に目を向けられるようになってきたが、まだ、それを生かして生活し、活動するまでにはいたっていない。
- ⑤ 自己理解が不十分で、より高い目標に向かって取り組もうとする姿勢に弱さがみられる。
- ⑥ ネットの普及による情報化社会の中で、進んで情報を収集しようとする姿勢が出てきたが、生き方を主体的に選択する能力の弱さから、その情報を十分生かすところまでには至っていない。
- ⑦ 活動面で集団との調和ができず、他とのかかわりの中で、共生するためのコミュニケーション能力が不足している。
- ⑧ 活動の目標や計画立案および活動の振り返りや反省等の話し合い活動を自主的に運営する力が弱い。

(2) めざす児童・生徒の姿

- ① 自ら課題を見つけ、仲間と互いの考えを交流して考えを深めることができる。
- ② 自己や他者の「よさ」に気づき、積極的にその「よさ」を生かせる。
- ③ 夢や希望を持って、その実現に向けての長期的な計画を立て、努力し続けられる。
- ④ 学ぶことや働くことの意義を知り、進んで活動に取り組める。
- ⑤ 国際化・情報化・高齢化の社会を迎え、将来の自分のライフスタイルを創造しようとする。
- ⑥ 知識を得た上で、体験活動して「生きる力」を身につけられる。
- ⑦ 情報社会の中で、知り得た情報を精査し、役立てることができる。
- ⑧ 行事などに積極的に参加し、自ら計画などの話し合い活動に関わっていける。

3. 研究テーマ

こうしためざす児童生徒の姿から実態をとらえてみると、児童生徒たちが「生き方」に対する学習に十分取り組めていないことや、児童生徒たちが自分の「よさ」を生かして自分の志を大切に生きていこうとすることが十分でないと言える。

また、学校における生活の基盤である学級集団などの中で、集団不適応などのさまざまな姿を見せること（コミュニケーション能力の不足）から、特別活動の原点に立ち戻りながら、21世紀を主体的に生きる児童生徒の育成につながる指導を創造する必要がある。

そこで、

令和3年度 県小中学校教育研究会 全県テーマ

「新しい時代を切り拓く資質・能力を身に付けた児童生徒の育成をめざす学校教育の創造」

○児童生徒の「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」を育む指導改善の推進

○児童生徒の豊かな心や健やかな体を育む教育の充実

○「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図る教職員の研修の充実

を受け、昨年度同様、「志ある者は事竟に成る」「少年よ大志を抱け」にあるように、成し遂げたいことをもって社会に出ることを目指す指導を目標にしていきたいと考える。

以上を踏まえ、本部会においては、本年度も次のような研究テーマを設定した。

仲間とのかかわりの中で志を抱く生き方指導

特活進路部会としての指導内容は、特活領域の指導と進路指導（キャリア教育）を位置づける。それぞれの内容において、「生き方」を指導していく場はあるが、本部会においてはこれまで、進路指導を学級活動の場においてきた流れと、児童生徒が主体的に生活を作り上げ、生き方を考えさせていくために大きな成果を期待できることから、学級活動の場を中心に研究してきた。

今年度も、特活領域全体に幅を広げつつ、キャリア教育につながる視点をもって、児童生徒の社会的自立につながる力を確かなものにしていくため、上記の研究テーマのもと、各地区・都市・各校・各会員で、それぞれの実態に応じた場で、「生き方」指導を追究していきたいと考える。

4. 研究の視点

(1) 活動の過程と指導方法の工夫改善

- ① 学級活動における指導事項を精選し、指導の内容を明らかにした指導計画を工夫する。
- ② 児童会や生徒会、行事などにおいて、児童生徒の主体的な活動を計画し、共に活動する喜びと達成感から、新たな目標に挑戦していく態度が持てるように指導方法を工夫改善する。
- ③ 進んで自分や進路など生活についての情報を収集し、自分の生き方を見つめ、体験的な活動に取り組む中で、将来への夢や希望を持ち、志を抱く指導方法を工夫改善する。
- ④ 自己を伸ばす能力を養うとともに、キャリア教育推進のための学習プログラムのより効果的な指導の在り方を工夫改善する。
- ⑤ 「のびる」を活用した学習を進め、指導内容や指導方法の工夫改善を求める。
- ⑥ 「生きる」を活用した進路学習を進め、指導方法の工夫改善を求める。

(2) 「生き方」に関わる情報収集・活用の力を高める指導方法の工夫

- ① 将来をよりよく生きようとするために必要な選択と適応の力を高めるために、児童生徒にとって必要な情報の提供のあり方について模索する。
- ② 児童生徒による情報収集・活用の力を高める指導方法の工夫を図る。

5. 事業

- (1) 進路指導学習や特別活動の指導方法に関わる交流を進める。
- (2) 「夏季ゼミナール」を開催し、体験活動や授業実践の交流を行い、指導方法や研究の成果を確かめ合う。部会への加入者のみならず、部会以外の方々や大学生を含めた参加希望者に広く呼びかけていく。
- (3) 中学校における進路指導のための冊子「生きる」の実践的研究を深める。
- (4) ホームページを充実し、情報を発信する体制を作る。